

ニッポンバラタナゴの保全のための“ドビ流し” ～大阪府八尾市ふれあい池におけるニッポンバラタナゴの保護活動～

大阪経済法科大学 ECO～る∞KEIHO・川瀬 成吾

ニッポンバラタナゴは絶滅危惧 I A 類に指定されているコイ科の魚で、現在では、大阪府八尾市のため池や香川県高松市のため池、奈良県および九州の一部のため池や用水路に生息している。ニッポンバラタナゴは、ドブガイに卵を産み付け保護してもらおうという習性があるため、ドブガイの生息していない環境では子孫を残すことが出来ない。

ドビ流しとは、ため池の樋（栓）を抜き、富栄養化した水と共に堆積したヘドロを排出する、伝統的な水管理方法である。かつてはドビ流しをすることによって、田畑は改良され、ため池の生物多様性が維持されてきた。ふれあい池で行うドビ流しの目的は、ニッポンバラタナゴを含む生物多様性の保全と、ドブガイの繁殖の促進である。

大阪経済法科大学では、2006年から毎年校内にあるふれあい池の“ドビ流し”を実施している。魚類は50mの底引き網を2度引き、採集した。個体数は標識再捕法を用いて推定し、2013年には全数調査を実施した。また、2015年度の推定個体数は視覚による概数である。ドビ流しを開始した2006年段階では外来種であるオオクチバスやブルーギルが生息していた。1回目のドビ流しにて外来種の駆除を行うも、ニッポンバラタナゴの個体数の増加は見られなかった。2009年より、ドビ流し後、山土の投入を行った結果、ニッポンバラタナゴ、ドブガイ共に、大幅に個体数が増加した。10年間“ドビ流し”行い、そして2年に1度のペースで腐葉土を含む山土を投入することで、ニッポンバラタナゴの生息や繁殖に適したため池環境を復元できることができた。